

平成27・28年度 自主研究

「潤水都市さがみはら」にふさわしい観光事業の推進

市民研究員 佐藤 鉄郎

# 目次

序 章 .....	3
第1章 研究の目的と研究の方法.....	3
第1節 研究の目的.....	3
第2節 研究の方法.....	3
(1) 統計資料分析.....	3
(2) 参考文献の購読.....	3
(3) 実態調査 .....	3
(4) アンケート・ヒアリング調査.....	3
第2章 観光のあり方の変化.....	4
第1節 国の政策と国民の意識.....	4
第2節 ニューツーリズムの理論的検討.....	5
第3節 先進事例調査.....	6
(1) 山梨県小菅村 ー多摩川源流であることを生かしたツアーー.....	6
(2) 長野県阿智村 ー夏のスキー場を使った星空見学ツアーー.....	7
(3) 青森県五所川原市（津軽地吹雪会） ー冬の地吹雪体験ツアーー.....	8
第3章 相模原市における観光事業の現状.....	9
第4章 津久井里山体験ツアー.....	11
第1節 津久井里山体験ツアーの背景.....	11
第2節 津久井里山体験ツアーの概要.....	11
(1) 原型としての藤野里山体験ツアー.....	11
(2) 津久井里山体験ツアーの展望と課題.....	16
第3節 津久井里山体験ツアーの意義.....	16
第5章 相模原市に期待する施策.....	18
終 章 .....	18
【参考文献】 .....	19

## 序 章

かの古典派経済学者、アダム・スミスは都市化が進む中での農山村の意味についてこう述べている。「農村の美しさ、田園生活の楽しさ、それが約束する心の平穩、そして人間の諸法の不正義が妨げないかぎり田園生活が実際に提供する心の安らぎ、これらは多かれ少なかれ万人をひきつける魅力をもっている」（アダム・スミス「国富論」岩波文庫）と。また、外国生活が長い知人の話によれば、「どんな国でも首都圏に1時間程度でアクセスでき、かつ自然に恵まれた地域は人気が高く、地価も結構高い」とのことである。残念ながら、日本にはそのような状況はないが、首都圏に近い農山村は、都会に住む人たちに癒しとリフレッシュを提供する地域であることは間違いあるまい。

さて、相模原市は合併によって、以上のような意味での農山村である津久井地域を市域に加えた。そのことの意味を生かし、独自の発展のあり方を探ることは、「潤水都市さがみはら」の内実を整える上で不可欠な課題であろう。

## 第1章 研究の目的と研究の方法

### 第1節 研究の目的

本研究は相模原市における観光振興の具体策を提案し、実施に向けた仕組みづくりをすることを目的とするものである。さしあたり、藤野地区で2015年10月以来実施している藤野里山体験ツアーの経験をモデルケースとし、そのツアーを津久井全域に広げる形で同ツアーを相模原市のセールスポイントになりうる観光事業として提案したい。こうした試みは、「相模原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の重点プロジェクトの一つである「中山間地域対策プロジェクト」にも深く関るものと思われる。

### 第2節 研究の方法

#### （1）統計資料分析

観光に関する意識調査、政府関連機関等が刊行する資料等を分析し、近年の観光のあり方をデータから明らかにする。そのことを前提に、相模原市についての資料により、相模原市の観光の現状を分析する。

#### （2）参考文献の購読

最近の観光業に関する資料分析および研究成果の検討を通じて、今日期待されている観光のあり方を確認する。また、それらの検討の結論と相模原市の観光振興とが、どのように関係付けられるのかを整理する。

#### （3）実態調査

津久井地域の観光振興を進めるうえでモデルとなる藤野里山体験ツアーについて、その実施に至るまでの経緯、実施のねらい、実態などを整理する。

#### （4）アンケート・ヒアリング調査

藤野里山体験ツアーの参加者、受入れ家庭へのアンケート調査、ヒアリング等によって参加者の評価および受入れ家庭の状況などを明らかにする。また、相模原市緑区役所及び津久井地域内の各まちづくりセンター、観光協会などへのヒアリング調査によって、津久井地域における観光振興の可能性について検討する。

## 第2章 観光のあり方の変化

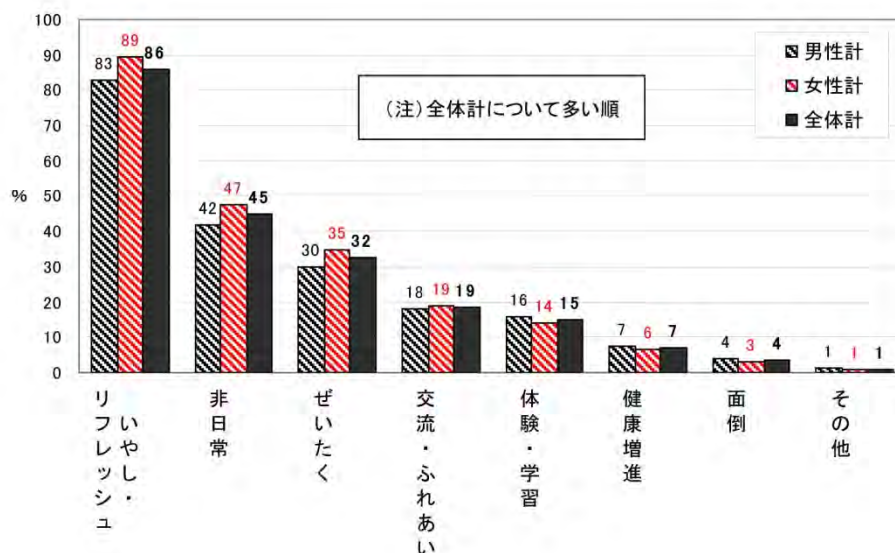
### 第1節 国の政策と国民の意識

2006年、それまでの「観光基本法」を全面改正する形で制定された「観光立国推進基本法」では「観光は、地域経済の活性化、雇用機会の増大等国民経済のあらゆる領域にわたりその発展に寄与するとともに、健康の増進、潤いのある豊かな生活環境の創造等を通じて国民生活の安定向上に寄与するものであることに加え、国際相互理解を増進するものでもある」（前文より）と指摘されている。観光は国民経済の発展、国民生活の向上、そして国際相互理解の増進に資するものとして位置づけられているのである。

この観点から、政府は新たな観光のあり方を積極的に支援しようとする姿勢を打ち出した。2012年閣議決定された「観光立国推進基本計画」（以下「基本計画」）では、「新たな観光旅行の分野の開拓」をその重要な柱の一つとして提起している。「新たな観光旅行の分野」とは「ニューツーリズムの創出・流通」ということである。「基本計画」はニューツーリズムの例としてグリーンツーリズム、エコツーリズム、産業観光、ロングステイ、ヘルスツーリズム、文化体験などを示している。

こうした政府の姿勢は、国民の観光に対するイメージの変化と重なるように思われる。例えば、公益社団法人日本観光振興協会による「『観光立国』に関する国民の意識調査」（2012年）は第1図のような調査結果を明らかにしている。

第1図 「観光」に抱くイメージ（男女別）



出所；公益社団法人日本観光振興協会「『観光立国』に関する国民の意識調査」

(2012年) 12ページより

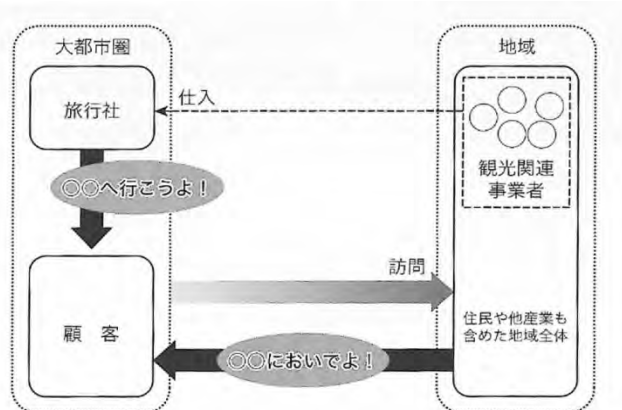
男女、世代を問わず、8割以上の方が観光に抱くイメージは「癒し・リフレッシュ」なのである。つまり、観光は単なる物見遊山ではなく、自分の生活を見直し、より有意義な人生を過ごすために必要なことであるという意識が芽生えているのである。このようなイメージ、意識にこたえる観光が、まさにこれからの時代に求められる観光の主流になってい

くものである。

## 第2節 ニューツーリズムの理論的検討

「基本計画」にいうニューツーリズムとは、理論的にはどのような概念としてとらえられるものであろうか。大澤健によれば、ニューツーリズムの最大公約数的なイメージは、「『ありのままの地域資源』を見つめなおし、従来は観光用とは考えられなかった新しいネタを活用して、体験型・交流型の旅行を開発すること」（大澤健「観光革命」角川学芸出版、2010年）である。すなわちニューツーリズムとは、地域のありのままの資源を利用して、ありきたりの観光施設やイベントに飽きてしまっている観光客をひきつける体験型・交流型の観光としてとらえられるものである。そしてこのニューツーリズムにおいて、観光の形態は根本的に変化することになっている。いわゆる発地型観光（旅行業者が出発地で観光客を募集して開催する観光）から、着地型観光（地域が募集し、観光客が直接観光地を訪れる観光）への転換である。この関係を大社充は第2図によって説明している。新たな観光のあり方は、観光の主体の変化をも引き起こしているのである。

第2図 「行こうよ（発地）型」から「おいでよ（着地）型」へ



出所；大社充「地域プラットフォームによる観光まちづくり」学芸出版社、2013年23ページより

以上のようなニューツーリズムが観光の主流になりつつあること背景には、次のような事情がある。

第1に、観光ニーズが多様化していることである。今日、観光に求められるニーズは、旧来型の名所旧跡を巡ることにとどまらず、体験・交流・本物志向など多様なものに及んでおり、それに応える必要がある。第2に、インターネットの普及によって、観光地から観光客へのダイレクトな情報発信が可能になったことである。旅行商品販売方法に大きな変化が生じているのである。第3に、交通手段の個人化によって移動の選択肢が増えたことである。特にマイカーの普及が自宅から観光地に直接移動することできるようになったことの意味は大きい。第4に、地場産業や一次産業の衰退によって地域が観光産業振興策をとらざるをえなくなったことである。観光が地方の経済活性化の手段として注目されつつあるのである。第5に、外国人観光客の増加に対して、地域のよりきめ細かい対応が必

要とされていることである。外国人の訪日旅行の動機として、日本人のライフスタイルや生活文化への関心が最も大きく、これに応える必要が生じたのである（以上、尾家建生・金井萬造編著「これでわかる着地型観光」学芸出版社、2008年）。

ただし、ニューツーリズムを実際に運用していく上では、少なからぬ問題点も指摘されている。大澤によれば、第1に、受入れ体制を作ることの困難さである。もともと観光用ではない資源を観光用に用い、観光に関心などなかった人たちを観光人材として育成しようとするのであるから、無理があることは前提でもある。グリーンツーリズムを実施する際に受入れ農家を説得することの難しさなどはその典型例である。第2に、収益性が低いことである。ニューツーリズムは観光用の資源を使うのではないため、大量の観光客を受け入れることは難しい。少人数の客をたまにしか受け入れられず、手間暇かけて対応するのであるから収益性は当然低くなる。第3に、集客が難しいことである。「新しいネタ」を使って体験型のツアーやプログラムを作っただけでは見たものの、集客の方法が分からずに立ち止まってしまいう例は少なくないのである（以上、大澤健、前掲書）。

上記のような諸問題を克服するためには、直接的にはガイド、地域コーディネーターなどの人材を確保することが求められよう。しかし、より根本的な問題の解決のためには、そもそも今日の社会において、ニューツーリズムが提唱されていることの意義をどう考えるかということを確認する必要がある。つまり、ニューツーリズムは、旅行会社に代わって地域の人たちが集客を進め、収益を上げるための新たな営利行為でもなく、また収益は無視してでも地域おこしに役立てばいいという公益活動でもない。むしろ収益がある程度保障されなければ持続可能性はないことになる。さりとて、地域貢献を無視した収益の追及もあり得ない。この点に関して、注目されることは、大澤が提唱している「地域づくりのための観光」と「観光—地域づくり循環」である。「『地域づくりのための観光』とは、観光によって地域をもっと魅力的にすることで、観光地としての魅力を向上させることを意味している。観光が地域にプラスの効果を与えれば、結局はそれが地域の魅力の向上につながり、最終的には観光産業に収益をもたらす」（大澤、前掲書）のである。観光によって地域の魅力が向上し、地域の魅力の向上が観光業の収益につながるところにニューツーリズムのエッセンスがある。ニューツーリズムは循環的に地域を活性化する手法として、現代社会に意義づけられるものであろう。そうとらえてこそ、ニューツーリズムが地域において果たす役割も明確になるものと思われる。

### 第3節 先進事例調査

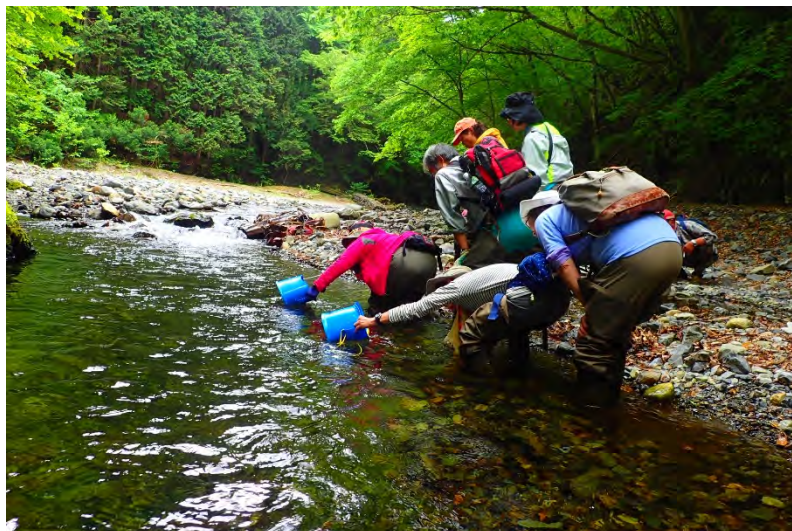
以上、検討してきたニューツーリズムには多くの先進事例がある。そのいくつかを見ておきたい。

#### （1）山梨県小菅村 —多摩川源流であることを生かしたツアー—

小菅村の観光資源は「源流」である。小菅村は多摩川の源流部にあり、「多摩源流」と呼ばれている地域である。源流の澄んだ川と緑豊かな山に囲まれ、昔ながらの文化が残る、まさに日本の原風景といえる村である。こうした条件を利用して、NPO法人多摩源流こすげでは各種のツアーを開催している。例えば「多摩源流沢歩き」である。腰まである長靴（胴長）を履いて、源流を熟知したガイドとともに源流の沢を歩く。ヤマメやイワナとの出会



いがあり、春には山菜、秋にはキノコを採ることもできる。昼食には小菅村の食材を使った源流弁当(ヤマメの唐揚げ・こんにゃく・ワラビなど)を提供する。小菅村の自然そのものを満喫できるツアーである。



(源流を観察しながら歩く)

出所；「NPO 法人多摩源流こすげ」ホームページより掲載

NPO 法人多摩源流こすげでは、ほかにも源流を生かしたツアーとして、ライフジャケットとヘルメットを身につけて、源流の水の中に飛び込むなどの源流体験などを企画している。集客にあたって注目されることは、ホームページや各種 SNS を駆使する以外に東京農業大学等の大学の特設講座、各種企業研修プログラムとつながっている点である。多摩源流に関する座学やツアー参加が大学の講座の一環として用意されたり、ストレス解消ツアーなど企業研修プログラムが提供されているのである。こうして大学や企業とつながることで集客が安定している。こうしたことから、ツアー運営によって NPO 法人は経済的に自立できる程度の経済効果を確認しているとのことである。

## (2) 長野県阿智村 ―夏のスキー場を使った星空見学ツアー―

阿智村の観光資源は星空である。かつて、昼神温泉とスキー場を観光の目玉としていた阿智村では、温泉観光客やスキー客の減少に伴って、「このままでは子どもたちに阿智村を残すことができなくなるのではないか」といった危機感から、新たな地域おこしの取り組みが求められていた。これに応えたのが、「ヘヴンスそのはら」というスキー場経営会社によって、2012 年から始まった「日本一の星空ナイトツアー」がそれである。もともと、阿智村は 2006 年、環境省によって「日本一星空の観測に適した場所」と認定されていた。この希少性を生かし、また冬以外は使用していなかったスキー場を利用して、標高 1400m に位置する芝生などに座ったり寝転んだりして星空を眺める。1400m の高地に行くにはスキー用のゴンドラが利用される。

事業開始以来、今日に至るまで総売上額は 150 億円を超え、年間平均 10 万人の観光客を

集めるといった経済効果をあげている。一時衰退していた昼神温泉の旅館は、ツアー開催時には満室状態が続き、1年前からの予約が必要とのことである。こうした経済効果は周辺自治体にも波及しているとのことである。運営主体が民間企業であり、広報活動や旅行会社との提携による集客など、その強みがいかに発揮されている例といえよう。



(街の光が全く届かない山頂での星空観察)

出所；.長野県阿智村「スタービレッジ阿智」ホームページより掲載

### (3) 青森県五所川原市（津軽地吹雪会） —冬の地吹雪体験ツアー—

五所川原市、旧金木町の観光資源は吹雪である。旧金木町は作家太宰治の生家がある町として知られるが、特に観光資源らしきものはなく、訪れる人も少なかった。1～2月に吹く強い北西風は雪を巻き上げ、ホワイトアウトといわれる何も見えない状況を作る。それは地元民にとっても危険になる現象であった。この地吹雪といわれる「ハンディ」を逆手にとってツアー化したのが「雪国地吹雪体験プログラム」である。このツアーを企画したのは企画集団「ラブリー金木」という地域の活性化を模索するボランティア集団であり、その集団をけん引する人物は、国の観光カリスマにも選ばれた角田周氏である。

ツアー参加者は角巻・もんぺ・かんじきといった雪国の3点セットを身に着けて、地吹雪の中を巡る。さらに馬そり体験があり、郷土食タラの「ジャッパ汁」がいただける。集客上効果があったのはテレビ等のマスコミに取り上げられる機会が多かったことであろう。企画のユニークさがマスコミの注目するところとなったのである。また、集客方法として注目されるのは、JTBなどの旅行会社との提携である。旅行会社は外国に向けてこのツアーを積極的にPRしている。特に、雪のない台湾やハワイなど外国の地域からも数多く訪れるという。これらによる経済効果は計り知れない。任意団体である「ラブリー金木」はもともと収益を目指す団体ではないが、その運営はツアーの収益によって確保されているとのことである。





(吹きすさぶ地吹雪の中を歩く)

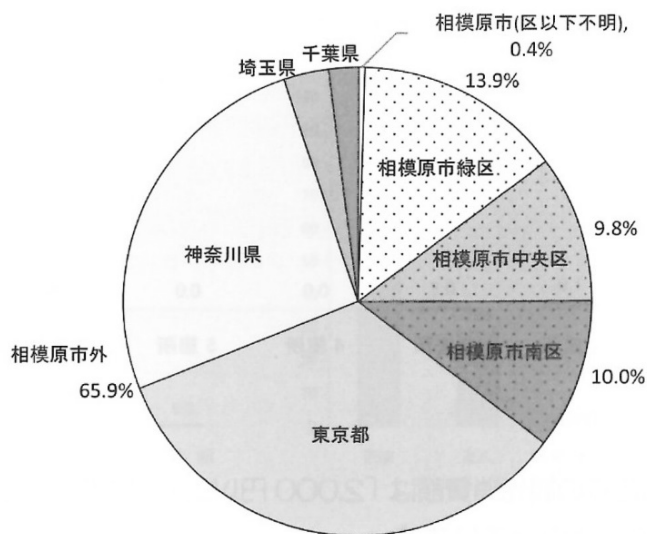
出所；青森県観光情報サイトホームページより掲載

### 第3章 相模原市における観光事業の現状

神奈川県観光振興対策協議会の「平成 24 年神奈川県入込観光客調査報告書」によると、2012 年の相模原市への入込観光客数は 1,163 万 7 千人、その県内におけるシェアは 6.7% となっており、年々増加傾向にあるという。観光客 1 人当たり消費額は同じく 2012 年には 1,192 円となっており、2006 年に比べると約 72% 増加している。ただし、県全体の 1 人当たり消費平均額は 2,535 円になっており、それに比べるとやや見劣りがする。

「平成 23 年度相模原市観光客実態調査」によると、観光客の居住地域は第 3 図のようである。

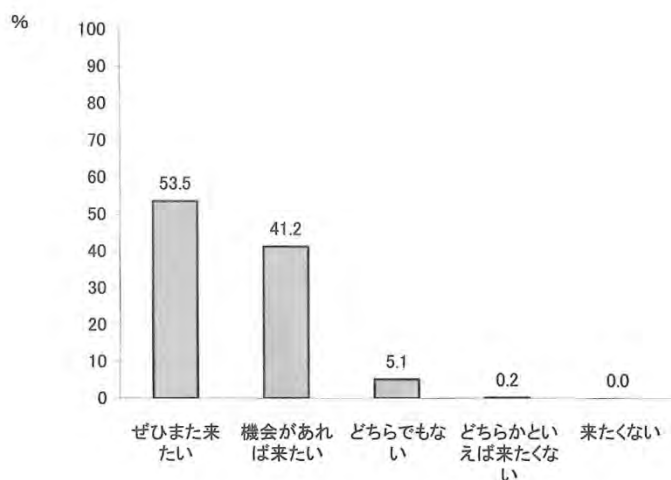
第 3 図 居住地域別に見た相模原市への観光客



出所；相模原市「新相模原市観光振興計画」11 ページより

見られるように、観光客は相模原市外居住者が65.9%、市内居住者が34.1%となっている。東京都と相模原市を含む神奈川県以外では、埼玉県、千葉県が合わせて5%程度になっている。要するに、相模原市は主として東京都、神奈川県居住者を対象とする観光地であり、距離感からしてその大半が日帰り観光であろうということである。そうしたこともあって、リピート率が高いことも相模原市の観光の特徴である。観光客の5割が市内の同一観光地を「5回以上」訪問しており、第4図にみられるように、「ぜひまた来たい」「機会があれば来たい」が合わせて9割以上に及んでいるのである。

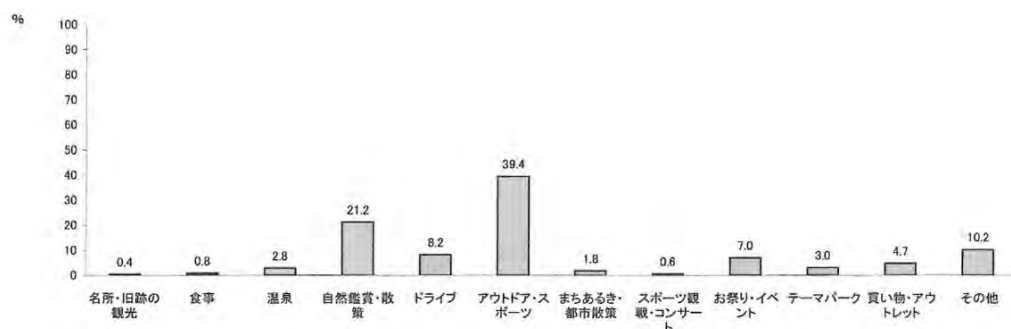
第4図 相模原市への観光客の再来訪意思



出所；相模原市「新相模原市観光振興計画」14ページより

また、相模原市に観光に来る目的であるが、第5図に見られるように「アウトドア・スポーツ」や「自然鑑賞・散策」が多い。

第5図 観光目的別に見た相模原市への観光客



出所；相模原市「新相模原市観光振興計画」11ページより

「アウトドア・スポーツ」と「自然鑑賞・散策」目的の観光が60.6%を占めている。これに対して名所・旧跡の観光はわずか0.4%にすぎない。

以上のような状況をふまえ、相模原市は「新相模原市観光振興計画」に基づいて、全市

的な取り組みとエリア別計画に基づく地域特性に応じた取り組みを通じて観光振興策を推進している。

全市的な取り組みは「都市の魅力と豊かな自然資源を生かした観光振興」「おもてなしの心あふれる人と組織づくり」「観光情報の充実」を基本方針とし、合計 51 の事業を推進している。また、エリア別計画では市内を 9 つのエリアに分け、合計 93 の展開方向を示し、観光振興の具体的な取り組みが進められている。加えて、エリアごとに地域住民が主体的に協議して地域への誘客を図る「地域別計画」の策定・推進を通じた観光振興が進められている。

こうした取り組みにもかかわらず、今日なお相模原市の観光振興の具体的なイメージが市民間に共有されているとは思えない。特に、合併によって相模原市に加えられた津久井地域の自然資源を十分に生かした観光振興は、その必要性が謳われている割に、具体的な進展を見ておらず、各地域がバラバラに取り組んでいる感がある。都市と自然豊かな地域を併せもつといった独自の行政単位において、何をもって観光のセールスポイントとするかはなお不明確のままであるように思われるのである。

## 第 4 章 津久井里山体験ツアー

### 第 1 節 津久井里山体験ツアーの背景

ところで、第 2 章で検討したような新たな観光の動向は、津久井地域における観光振興に示唆を与えるものである。津久井地域は首都圏から 1 時間程度でアクセスできる立地であり、また旧市内からほどよい距離にある。旧市市民や首都圏の住民にとって、津久井地域は交流型・着地型観光に適した位置にあるということである。

加えて、津久井各地域には伝統ある独自の魅力がそれぞれに存在する。例えば藤野地区は藤田嗣治ら戦時中の疎開画家の伝統を引き継いで、「アートの棲むまち」といわれている。相模湖地区には戦後日本で初めてできたダム湖である相模湖があり、県内唯一現存する本陣、小原宿本陣が残されてもいる。津久井地域には道志川沿いにキャンプ場がいくつもあり、鎌倉時代に築城されたといわれる津久井城の歴史がある。城山地区は津久井地域の中でも橋本といった都市部に隣接した里山としての魅力をもつ。これらの独自の魅力はそれぞれ交流型・着地型観光の資源となりうるものである。

### 第 2 節 津久井里山体験ツアーの概要

#### (1) 原型としての藤野里山体験ツアー

##### ①経緯

藤野里山体験ツアーは、農家民泊の実現可能性を探る中で企画された。藤野観光協会では、2013 年度当初から農家民泊実施の可能性を探り始めていた。そして同年 10 月開催の、藤野地区まちづくり懇談会の場で、地域おこしの究極の策として、農家民泊の導入を提起した。農家民泊はまた移住促進策にリンクするものとしても構想されていた。しかしその後、農家民泊の法的条件を検討する過程でそのハードルがかなり高いことが分かり、また受入れ候補家庭にあっても、宿泊を受け入れることに少なからぬ抵抗感があり、泊を伴う体験ツアーは断念するに至った。そして、さしあたり日帰りの体験ツアーを実施してみよ

う、その実績の上で農家民泊もその実施が可能になるかもしれないと判断したのである。

2015年6月にモニターツアーを実施、その成果を踏まえて里山体験ツアーのチラシ、ホームページ、実施マニュアル、実施に関するQ&A集等を作成した。同年7月、受入れ希望家庭、旅行会社、藤野地区内関連団体など26名の参加を得て藤野里山体験ツアー説明会を開催した。この際に数軒の受入れ家庭の申し出があり、8月には自治会回覧を利用して受入れ家庭をさらに募集し、また口コミを通じて呼びかけを行い、最終的に9軒の受入れ家庭を確保するに至った。こうして10月に初めてのツアーを受入れ、その後少しずつ受入れの問い合わせをいただくようになった。2016年4月、各受入れ家庭が1回以上受入れを行った時点で、受入れ家庭打ち合わせ会を実施し、それぞれの受入れ状況や受入れの感想などについて話し合った。そして同年12月には初めて外国人のお客さんをお迎えすることもできた。

## ②内容

ツアーは、現地集合・解散を原則とし、畑作業、川遊び、森遊び、加工食品作りなど各種の里山体験をし、昼食は参加者が受入れ家庭と一緒に里山の伝統食を作り、食べるというものである。この間に参加者と受入れ家庭はさまざまな形で交流を図る。



(干し柿作りに挑戦)



(サトイモ掘り体験)



(自分たちで打ったうどんをゆでる)



(山の散策を終えて)

## ③実績

藤野里山体験ツアーは2015年6月にモニターツアーを行い、同年10月から本格的に稼



働した。ツアー参加者及び受け入れ家庭にヒアリング調査、アンケート調査を行った。その結果、ツアーの実績は以下のようにまとめられる。

まず、参加者の居住地であるが、第1表に見られるように、横浜市居住者の友人であるアメリカ人を別にすれば、参加者は神奈川県と東京都居住者のみで、それぞれが同数程度になっている。これは相模原市全体の観光動向にも合致する傾向である。

第1表 藤野里山体験ツアー 居住地別参加者一覧

都県等	市町村等	人数	備考
神奈川県	横浜市	15	
	川崎市	2	
	相模原市	24	団体参加あり
小 計		41	
東京都	新宿区	2	
	目黒区	4	
	大田区	2	
	調布市	3	
	国立市	25	団体参加あり
	町田市	8	
	八王子市	1	
小 計		45	
アメリカ合衆国	ミシガン州	1	
合 計		87	

(2015年6月～2016年12月)

次にツアー参加者のグループ類型別であるが、第2表に見られるように家族が中心で、これに団体が加わるという形になっている。

第2表 藤野里山体験ツアー グループ類型別参加者一覧

グループ類型	大人	子ども	合計
個人	1	0	1
夫婦のみ家族	8	0	8
子どもあり家族	17	21	38
団体	13	27	40
合 計	39	48	87

(2015年6月～2016年12月)



当初、団体の参加は想定していなかったが、里山体験ツアーにはある特性をもった団体の参加もあった。ちなみにこの期間の団体客は発達障害のある子どもたちの放課後の居場所づくりを行っている NPO 法人及び子ども会であった。また、諸般の事情によって実現には至らなかったが、横浜国立大学附属小学校 4 年生 105 名からの参加打診もあった。いずれも教育的目的をもつものであり、里山体験ツアーがこうした要望にも応えうるということは、実施してみてもはじめて分かった発見であった。

次に、具体的な里山体験の内容であるが、第 3 表のとおりである。

第 3 表 藤野里山体験ツアー 体験別内容一覧

体験別	具体的内容
野菜等収穫体験	キャベツ、ピーマン、ネギ、里芋、玉ねぎ、ホウレン草、大根、八つ頭、サツマイモ、落花生、トウガラシ等 キウイ、ゆず、クリ、シイタケ等
作業体験	じゃがいも植え付け、イモ洗い（イモこすり器）、竹の食器作り、しめ縄作り
伝統食品作り体験	すいとん、手打ちうどん、煮込みうどん、おたらし、けんちん汁、流しそうめん、酒まんじゅう、かぼちゃまんじゅう
里山遊び体験	川遊び、山の散策、ツリーハウス、山の整備、ムロひよこ飼育
加工食品作り体験	干し柿、焼き芋、ゆずジャム、こんにやく

(2015 年 6 月～2016 年 12 月)

#### ④参加者の声

参加者は一様に里山暮らしに思っても見なかった体験をし、そこに新たな価値を見出している。以下、参加者の感想の記録である。

- ◎八つ頭の茎も持ち帰りでしたが、頑張って干して食べてみます。子どもは受入れて下さった家庭とすっかり溶け込みました。「今夜はここに泊って行く！」と言われた時はちょっと困りましたが…。
- ◎収穫したこんにやく芋を使ったこんにやく作りそしてうどん作りにも挑戦しました。へえ～！すごーい！僕がやる！私がやる！美味しそ～！等々大盛り上がり!! 楽しい 1 日となりました。こんにやくもおうどんも美味しかったですよ～♪
- ◎今日は大きい声を出してもいいよ！って。山に向かってみんなで「やっほー！」って叫んでみたら山が「やっほー」とこだまを返してくれたよ !!
- ◎赤く実った唐辛子をたくさん摘みました。自宅でそれを使ってきれいなリースを作りました。里山を偲ぶ素敵なリースになりました。
- ◎干し柿作りをやりましたが、家に帰って干し、上手にできました。ビバ、里山！ ビバ、藤野！
- ◎イモこすり器、子どもたちがとても気に入りました（こすりすぎたんじゃないでしょう

か?)。面白かったです。うどん打ちは思ったより力が要りましたが、そのおかげで腰のあるおいしいうどんをいただくことができました。

- ◎本日はとても楽しい時間をありがとうございました！ I さんのお人柄とものすごいパワーに感銘を受けました！ 子供たちも大喜びで、今度は暖かくなった頃お邪魔いたします。
- ◎藤野、すごいですね！シュタイナー教育、藤野電力、アートのまち…。地域通貨がきちんと流通している現場をはじめてみました！素晴らしいですし、とてもうらやましいと思いました。またうかがいます。
- ◎日本に来たのは 8 回目ですが、観光地ではないところで、しかも一般の日本人の家で日本人と交流する体験は初めてでした。日本で一番いい思い出になりました。野生の猿が出てきてびっくり。モンキーウォッチングをやったらどうですか。

### ⑤受入れ家庭の感想

受入れ家庭では、子どもや孫を迎えるような気持ちで楽しくやらせてもらっているといった評価が一般的である。以下、受け入れ家庭からのヒアリング記録である。

- ◎若い夫婦を受入れました。到着後おにぎりを作り、その後、大日野原農業団地にある畑まで歩き、そこで収穫体験をしましたが、歩く間、いろいろな会話が気楽にできてよかったです。
- ◎特に困ったことはありませんでした。トイレも外から直接入れるところがあって、不便は感じなかったです。外で調理しましたが、子どもたちも参加して楽しんでもらえました。
- ◎新婚らしい若い夫婦が来ました。2人は田舎のことを全く分かっていない様子でした。何事にも感動してくれて、最初はお世辞なのかと思いましたが、本当に感動していたようです。おたらしは初めて食べたようですが、喜んで食べていました。調理の前に泥付きネギの皮をむいて、そこから白いネギが出てきたことにすごく感動していましたが、お客さんは意外なことに驚くのだと改めて思いました。
- ◎夫婦に子ども 2 人の家族を受入れました。うどん打ちはもっぱら 2 人の子どもが担当して、親は野菜を切ったりして汁を作りました。収穫したサツマイモをふかして食べましたが、おいしかったらしく、ずいぶんたくさん食べてくれました。
- ◎国立のいもむしクラブという学童クラブの子どもたちを受入れました。ジャガイモの植え付け作業をやったのですが、子どもたちはみんな一生懸命働いてくれました。手打ちうどんもみんなで協力して作りました。帰りには「帰りたくない」と言って泣く子もいるほどでした。後でお礼のはがきが届いたこともうれしかったです。
- ◎森の中で、子どもたちは大いに発散していたように思われます。普段は都会の中において、大声を出すことも静止されているようで、森の中では遠慮することなく叫んでいました。
- ◎体験は山作業が中心でした。雪のために倒れた木を処理したり、皮むき間伐という間伐方法を見たり、2 つあるツリーハウス体験などをしました。子どもたちは、ちょうどこの日やってきたヒヨコに触って遊んだり、広い「ムロ」の中を探検するなどなかなか体験できないことを楽しんでいました。

## (2) 津久井里山体験ツアーの展望と課題

津久井里山体験ツアーは、以上のような藤野里山体験ツアーの取り組みを津久井全域に広げる形で運営されるものとなろう。対象を拡大することで、藤野以外の地域に存在する独自の魅力が加わり、より多彩なメニューが用意できるものと思われる。

ただし、津久井地域の各まちづくりセンター、観光協会などへのヒアリングを通じて、ツアーを津久井全域に広げることには、少なからぬ課題があることも明らかになっている。合併後の津久井各地域にはそれぞれ固有の課題があり、その対応に追われているのが現状で、新たな事業に取り組む余裕がなく、例えば里山体験ツアーの実施にも高いハードルがあるようである。

明らかになった課題は、第 1 に、観光協会における人材の不足である。相模湖、津久井観光協会とも、事務局は実質的に一人で切り盛りしている。加えて、相模湖観光協会は湖上祭という大きなイベントの運営に多くの時間と労力を取られ、津久井観光協会では津久井観光センターの経営という大きな任務が負わされている。「とても里山体験ツアーなどといった新しい事業ができるとは思えない。仮に新たな人材が市の補助などで配置されれば別だが」といったところが本音のようである。

第 2 に、それぞれの地域に中心となって里山体験ツアーなどの地域活性化事業などに取り組む人材が不足していることも共通している。何らかの事業を行っていく場合、窓口になり、全体をまとめていける人材がないとなかなか前に進まない。「既存の団体の取り組みの一環として取り入れられれば実現可能であろうが、新たに団体を立ち上げて新たな事業に取り組むためには真ん中に立つ人がいなければならない。そういう人材が見当たらない」といったことが複数のまちづくりセンターで聞かれた。

第 3 に、各地区の特性がなお強い独自の力を持ち続け、地区を超えて例えば津久井地域全体として何かに取り組むといった姿勢がなかなか育まれにくいという事情である。無論それぞれの地域の独自性は尊重されて然るべきものである。しかし新相模原市になった現状で、全体として行えることは何か、それをどう実施していくかを考えることは大切なことであろう。しかし、旧津久井 4 町においても、4 町内の集落ごとにも取り組みはバラバラである。例えば相模原市のエリア別計画に基づく地域別計画策定・推進も、その意図とは別に地域ごとに完結し、市全体としてはおろか津久井地域全体の観光振興をどう展望するかにはつながっていないのが現状である。

第 4 に、現実的な問題であるが、近年その程度を強くしている鳥獣被害が、耕作放棄や里山伝統の加工食品づくりなどに深刻な影響を与えていることである。里山体験をする場所が狭められているということである。特に藤野地区、相模湖地区、津久井地区でそうした問題が顕著になりつつある。

以上のような課題を克服していくことは容易ならぬことであるが、まずは藤野でモデルを作り、その実績を積み重ねていく過程で、他地区への波及を図っていきたいと考えている。

### 第 3 節 津久井里山体験ツアーの意義

津久井里山体験ツアーが実施、運営されることになればその意義は多岐にわたる。

第1に、それが相模原市における観光事業の目玉の一つになりうることである。津久井地域ならではの観光資源を生かしたツアーは、相模原市が「新相模原市観光振興計画」の基本方針として謳う「都市の魅力と豊かな自然資源を生かした観光振興」の一手段になりうる。相模原市の新たな魅力を首都圏域在住の市民に楽しんでもらいたいと思う。

第2に、津久井地域と旧市市民の交流が深められることである。合併によって同じ相模原市民となったとはいえ、津久井地域市民と旧市市民の間には十分に理解が進んでいるとはいえない。現に旧市市民の中に、藤野地区など知らないという人は少なくない。こうした問題を解決するためには、とにかくお互いに行き、見て、知ることが必要であろう。里山体験ツアーはその具体的な場になりうる。

第3に、津久井地域の活性化に資することである。里山体験ツアーは、津久井地域の地域資源を生かした地域づくりであり、交流人口を増やし、また受入れ家庭に新たな働きがい、生きがいをもたらす、一定の経済効果も見込めるものである。総体として、津久井地域を元気にすることにつながるのである。そして、それらのことは相模原市の基本施策にも関わるものである。相模原市は2016年2月「相模原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(＝相模原市総合戦略)を策定し、その重点プロジェクトの一つとして「中山間地域対策プロジェクト」が設定している。このプロジェクトは「中山間地域を含む津久井地域の実態を踏まえ、計画的な土地利用や拠点の整備及び地域力の維持・強化や地域の担い手の確保を目指すものである(第6図参照)。津久井里山体験ツアーの実施はこうした相模原市総合戦略の意図を具現化するための一助になりうるものであろう。

第6図 相模原市中山間地域対策プロジェクトのイメージ図



※緑住集落地区：良好な自然環境や営農環境との調和を図りつつ、地域コミュニティを維持していく地区

出典；相模原市「相模原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」26 ページより



第4に、相模原市の国際化推進の一助になりうることである。ツアーは外国人、特に在留外国人をもターゲットにしうる。日本に滞在する外国人にとって、日本の原風景ともいえる里山を気軽に体験できることは魅力あるものであろう。ツアーは国際交流の推進に貢献する可能性をもつものでもある。

## 第5章 相模原市に期待する施策

津久井里山体験ツアーは、基本的には観光協会等が運営主体になって実施されるものであるが、その展開に当たっては、相模原市の協力も欠かせない。行政ならではの関与が期待されるのである。

具体的には、第1に、津久井全域の関連行政機関に里山体験ツアーの趣旨・意義を周知していただくことである。津久井全域がある程度歩調を合わせていかなければ、里山体験ツアーの展開は望めない。特に津久井地域の旧4町がなおバラバラで全体的な課題に取り組む体制が整っていない現状にあって、行政の指導力が大いに期待される場所である。

第2に、里山体験ツアーの効果的な広報活動の展開である。まず旧市市民への広報を期待したい。体験ツアーを市民間交流の有力な手段にしていきたいからである。続いて、市外の首都圏在住の市民への広報である。さらに在留外国人など外国人への広報も期待したい。

第3に、里山体験ツアー受入れ家庭の募集への協力である。里山体験ツアーの受入れ家庭としての意思を示すにはそれなりのハードルがある。そのハードルは、里山体験ツアーが行政も認知したものであることを示すことで相当程度引き下げられるものと思われる。それは行政ならではの信用力の活用であろう。

## 終章

2016年11月、藤野里山体験ツアーは、第7回かながわ観光大賞審査員特別賞を受賞した。他の受賞団体のツアーに比べれば、藤野里山体験ツアーは規模も小さく、実績もなお十分だとはいえない。ただ、地域にある資源をそのままに使った典型的な着地型観光としてその独自性が認められ、「これからもがんばってほしい」といった奨励賞的な意味を込めて選定していただいたものと理解している。藤野地区が、そして津久井地域が里山体験ツアーを通じて、独自の価値をもつ、小さくてもきらりと光るまちとして国の内外にアピールしていけるようになるため、より一層努力していきたい。





#### 【参考文献】

国交省「観光立国推進基本法」(2006年)

閣議決定「観光立国推進基本計画」(2012年)

日本観光振興協会「観光立国に関する国民の意識調査」(2014年)

日本生産性本部「レジャー白書 2016年版」(2016年)

相模原市「新相模原市観光振興計画」(中間見直し版)(2014年)

相模原市「相模原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(2016年)

大澤健「観光革命—体験型・まちづくり・着地型の視点」角川学芸出版(2010年)

大社充「体験ツーリズムの手法—地域資源を活かす着地型観光」学芸出版社(2015年)

大社充「地域プラットフォームによる観光まちづくり」学芸出版社(2013年)

尾家建生・金井萬造編著「これでわかる！着地型観光」学芸出版社(2008年)